
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A・I・N -

【Nコード】

N7562Y

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

一人のレイヴンの元に、一つの依頼が舞い込む、
「貴方にお願ひがあります」
オペレーターの冷たい声に、男は軽く溜息を吐いた。

- Mission 1 - 長い一日（前書き）

書き方が特殊なので見辛いかもしれません。
それでもご覧頂ける方には感謝を。

- Mission 1 - 長い一日

- - 雨が降っていた 空を覆うのは 灰色の雲……

雨が降っていた

降り止む気配は無い

外を見る 辺りは一面の砂

興味を引くような物は何も無い

目を閉じる 雨音が聞こえる

その音に耳を傾ける

一定のリズムで 雨は機体を打つ

そのリズムが心地良い

時刻 14:30 天候 雨

漆黒に彩られた機体の腹の中

操縦席のシートに 深く身を沈める

聞こえてくるのは水の音

目に見えるのは 崩れ埋もれたガレキだけ

” ザーム砂漠 ”

昔は都市であつたであろう面影だけを残し

今は 砂と石に覆われた世界

辺りに人の姿は無い

人間はこの土地を捨てた 用無しと言わんばかりに

そして 西に新たな楽園を求めた 人の住む都市

” ネオ・アイザック ”

新たに創られた人の巢は そう呼ばれている

ネオ・アイザックに向かおうとしているヤツがいる

そいつを口説いて落す これが今回の依頼

あまりにも衣装が派手なので 都市には入れたくないらしい

ヒドイ話だ…

この砂漠のど真ん中 既に1時間以上待っている

約束の相手は まだ 来ない――…

小さく電子音が響く 味気の無いコールサイン

『大丈夫ですか？』

それに続いて女性の声 その声もまた 味気無い

モニターに映った彼女が 切れ長の目で見つめてくる

だがその瞳は 何処か虚ろで無機質

それを隠すかのように掛けられた 縁無しメガネ

流れるように顔に掛かった綺麗な黒髪を

彼女は鬱陶しそうに横に撫で付けた

ついでそのまま 軽くメガネを押し上げる

彼女の容姿は上の部類だと思う まさに冷艶

だが 全体的にキツイ 冷淡な印象を受ける

その理由は 多分これだ 彼女には表情が無い

彼女の顔に 感情が浮かんだ所など一度も見た事が無い

笑顔なんて見たことすら無い　泣き顔なんて論外だ

それはまるで　生身の女性と言うより　綺麗な彫像

そんな　美しくも素っ気無い顔を眺めながら　思考の中へと埋没していく

彼女は言った　『今回のミッションだけは　お手伝い致します』と

何故？　真剣に悩んでしまう　事あるごとに邪魔ばかりするくせに

今まで役に立った事なんて　数える程も無いくせに　何故…？

……と言つかこの女　本当にオペレーターなのか？

『大丈夫ですか？』

再度　同じ問い掛け　聞こえていないと思ったらしい

「…聞こえてるよ…ニーナ」

【ニーナ】

それがこの　オペレーターとは名ばかりの女の名前

彼女は　『そうですか』　と言った後で

『でしたら』　と　続けた

『答えて下さい　大丈夫ですか？』

それに 一拍置いて答える

「…………何が？」

ニーナが溜息を一つ 小さく漏らした

彼女は感情を 表情に出す事はまず無い

だが 雰囲気と瞳に如実に現れるのを知っている

今がまさにそう まるで馬鹿を見るような目を向けてくる

冷たい印象が 更に冷たさを増してくるのがモニター越しに分かる

『準備は出来ているのかと聞いているのです』

苛立たしげに彼女は言う だからこう答える

「見ての通りだよ」

『解りません』

「…………残念」

ニーナを無視して 今回の依頼をもう一度 頭の中で整理してみる
まず どうかのバカが 何に使うのかは知らないが

大型の移動兵器を開発していたらしい

その大型移動兵器を 製造途中に別のヤツが破壊した

……しかし 再起不能 とまではいかなかった

お陰でこうして 初めてのオツカイが出来るまでに回復した

その行き先は ” ネオ・アイザック ”

買い物にしてはちょっと大袈裟すぎる

止めたいと思うのは まあ 当然だろう

「仕事は最後までやるもんだろ……」

破壊し損ねたどっかのレイヴンへ 文句と舌打ちを送る

『大型移動兵器の事ですか？』

独り言が聞こえたらしい

「……ああ」

曖昧に頷く 確かに間違っではないが 正しくも無い

でも訂正するのも面倒で 彼女の問に 適当な相槌を返す

『今回の目標について なにか質問が？』

やはり無表情だった 動くのは 瞳を覆う瞼の その瞬き位のもの
彼女と会話していると 機械か何かと会話している錯覚に陥る

「いや……」

質問 と言われても ココに来る途中で一通り聞いてある

今更 聞く事なんて無いが……

「そうだな もう一度確認だ」

彼女は俯くと 目の前のコンソールでも弄っているのか

何かを打ち込んでいるような 小気味良いリズムが聞こえてきた

『どうぞ』

彼女が顔を上げる 質問を待っていた

頷いて 「それじゃ」 と言って続ける

「目標の名前は？」

『グレイ・クラウド』

「大きさは？」

『詳細なデータはありません が ACの軽く3倍以上はあると
思われます』

「…それで”Gray Cloud（灰色の雲）”ね」

思わず空を仰ぎ見る

『他には何か？』

彼女の声に 視線を戻す 口元に手を置いて考える

「そうだな……」

目標の獲物を再確認してみよう 何せ相手のセンスは最悪だ

仮装パーティーにでも呼ばれたかと疑いたくなる程派手な衣装

「ソイツの武装について」

彼女は再度 コンソールを操作する

普段は虚無を映しているその瞳に

今は 様々なデータが映り込んでいた

『製造途中のデータしかありませんが 宜しいですね？』

顔を上げて彼女は問う それしか無いんじゃないや仕方が無い

「ああ」 一つ頷いてみせる 彼女は続けた

『まずは 両腕からはグレネード弾 連射が可能です

次に エクステンションからは エネルギー系のマシンガン

更に本体上部 左右に8連ミサイルポット

最後に 目標本体から小型自律兵器の射出が可能 以上です』

モニターに映った情報を ニーナは一気に読み上げた

そして彼女は顔を上げる 同時に 彼女へ両手を上げてみせた

「ご立派 とても普通の兵器じゃ太刀打ちできないな」

呆れた笑いが込み上げる 連射が可能なグレネード弾？

祝砲にしちゃ賑やか過ぎだろ 花火にしても五月蠅過ぎる

それに加えてENマシンガン ミサイル ビット……

まったく オツカイじゃなくて 兵器の押し売りにでも行くつもりか？

仮装パーティーにしたって派手過ぎる 他の客が目を回すぞ

そんなんじゃ 門前で追い返されるのが関の山だ

『……ああ だからココに居るのか』

黒服姿で待つてる理由を 改めて納得した

次いで 無表情の仮面をつけた女が言う

『その通りです ところで……』

三度コンソールを弄る 唐突に深い溜息

『今回も その機体で出るつもりですか？』

『ん？ 何か問題 ある？』

どうやら彼女は 今回もお召し物が気に入らないらしい

『武器はブレードだけ ですか……』

『素手よりは マシだろ？』

肩を竦めて答えてやる 軽口を添えながら

A Cのアセンブルは パーツの数と人の数だけ存在する

武器だって ライフル マシガン バズーカ ミサイル e t c
e t c

使う戦術・兵装 そのスタイルによって 呼称も様々用意されている
銃をメインで使うならガンナー ミサイルが大好物ならミサイラー
と言う具合に

強力なものから連射の効くモノまで どれを使うかはレイヴンによ
って様々だ

……それだけ武器があるにも関わらず　いつも使うお気に入りのはただ一つ

左腕にブレードだけ　後はせいぜいリーダー位　他は何も積まない

彼女はいたく　それが気に入らないらしい

でも　このスタイルだけは譲れない

イカレてると言われても　馬鹿だと蔑まれても

あの人に近づくためなら　なんでもやる

あの人みたいに　強くなれるなら……

それ以降　仕事はこの機体で出る　これでも何とかなる

もし出来なくとも　何とかする　それが　レイヴン

【レイヴン】

企業や政府に雇われる者を　こう呼ぶ　要するに　傭兵

金さえ貰えればなんでもやる　仕事は確実に　こなす

それが出来なければ　死ぬだけ

『無茶ですね』

唐突に 遠慮も無くニーナは言う

瞳には いつも通りの無言の罵倒

「無理じゃあないさ」

彼女は諦めにも似た溜息を吐き 首を小さく横に振る

それっきり ニーナは黙ってしまった

沈黙の重圧がコクピットの中を覆う

青白い人工の光に照らされたニーナの顔を呆と眺め

……ふと そこでさっきまで考えていた事を思い出す

何故 今回に限って これだけ彼女は協力的なのか？

心配だから？ 死ぬかもしれないから？

有り得ない それは確実に 有り得ない

今までの仕事を思い出す 思わず身震い

あれはいつの事だったか 彼女は言った『敵機残り3機です』

それがどうだ 増えるわ増えるわ敵援軍16機

「どう言う事だ?!」 慌てふためきながら問い質した事があった

その時ニーナは何て言った？ その答えは至って簡素なものだったろ

『忘れてました』 たった一言 次に 『頑張ってください』 以上
終わり

何とか全機撃破 デイスプレイを殴りつけながら彼女を呼んだのを
覚えてる

あの時のあの表情 そしてあの言葉 あれは絶対本気だった 断言
できる

彼女はいつもの無機質な 虚無的な目で たった一言

『生きてらしたんですか』

あの時ほど ニーナに殺意を覚えた事は無い ついでに恐怖も……

それに… そうだ あれだってそうだ 他のレイヴンとの共同作戦

もう1人来るからと デートの待ち合わせをしてた時の事だ

突然 上から横から3機のACが飛び込んできた

驚きながら彼女に聞いたよな 「どいつが味方だ?!」 って

そしたら彼女はまたしても たった一言 『さあ?』

「フザケるな！」 怒鳴ろうとしたら 戦闘開始

それも 3機同時の多人数プレイ 味方なんていやしなかった

…… あれは…ヘヴィだった……

それが今までの彼女の所業 下手したら10回以上は死んでいる

それ程までに 彼女のよこす情報はヤバイ 正確性の欠片すらない

…… 欠片くらい 有っても良いんじゃないかな……？

それがどうだ？ 今回に限っては正確 いや 正確過ぎる

確かに 大抵の事は依頼主である監督局から聞いてある

しかし それは最低限の事だけだ ヤツがネオ・アイザックに向かっている

通常の兵器ではまるで齒が立たない だからレイヴンに頼む これだけだ

グレイ・クラウドの武装についても ニーナから聞かされた

ヤツの武装データなど極秘中の極秘の筈 それを何故？ どうやって？

製造途中なんて言うてはいるが それにしたって完璧すぎる

ニーナの顔をマジマジと見ながら 意を決して問い質す

モニターの向こう 光を反射しながら 彼女の瞳が青く揺らめいていた

「……一つ 聞いても良いか？」

『却下します』

即答 思わず頭を抱える

相変わらず取り付く島も無い

溜息を吐きながら それでも彼女の瞳を見つめる

今回は本気だ と言う事を 言外に伝えてやる

『解りました』

二ナは目を伏せると 小さく吐息

珍しく 彼女が折れた

『それで 何をお聞きになりたいと？』

「ああ」 言った後 生唾を飲む 彼女とこう言う会話をすると

どうもプレッシャーを掛けられているような気がしてならない

「……なんで今回に限って これほど協力的なのか」

その間に 不意に彼女の瞳の色が変わる

この男は 何を言っているんだ？ そんな感じに

『オペレーターですから 当然の事では?』

「どの口で言ってたんだよ!」

思わずディスプレイを叩きながら 怒鳴り声を上げてしまう
と言うか コイツにオペレーターの自覚があつたなんて……

その怒声にも やはり彼女は表情を変えない

「それで? 本当の所は?」

息を吐く まあ 感情が解らないのも 表情が読めないのも
言ってしまうばいつもの事だ 今更気にしたって仕方が無い

「……言えない?」

目の前のコンソールに腕を乗せ モニターに顔を近づける

見つめ合うこと数秒 甘さには程遠い時間の後

『……いえ 解りました お答えします』

目を瞑る 開ける そしてニーナは口を開いた

『貴方の事が……』

そこで彼女の言葉に割り込んで喋る ンな訳あるか

「心配ですから　なんて答えは無しだ」

小さく舌打ちが聞こえた　表情は変わらずに

「…………お前なあ…………」

怒りを通り過ぎて　思わずガツクリと肩を落す

『……………解りました　正直に言います』

大きな溜息　今度は正真正銘　観念した　そんな雰囲気を漂わせる

勝った　仕事が始まる前なのに　そんな充足感で一杯だった

「ああ　頼む」

緩みそうな顔を必死に堪えながら促す

それを見て　ニーナは訝しげな表情を浮かべる

次いで　何を馬鹿な事を考えて……………そんな目をしていた

素知らぬ顔でやり過す　「で？」　と彼女に話を促す

『アレは害悪です』

彼女の顔から　それこそ一切の表情が消える

一点を見つめる瞳は　何処か別な場所を見つめているような

様子の変わった彼女から発せられた言葉は　やはり変わっていた
それは全く意味不明　思わず眉を顰め　首を傾げながら問い返す
「害悪？」

害？　妨げ　支障　災　物事の妨げとなるような悪い事

頭の中で　その単語の一般的な意味を思い浮かべる

いや　確かにアレは　ネオ・アイザックにとっての脅威だろう

害になると言うのは解る　でも　しかし……

「……それは　誰の？」

彼女がまさか　都市の人間の事を心配するとは思えない

いや　それは流石に言い過ぎだろうか？　もしかしたら優しい心も

……

『決っているでしょう？　我々のです』

さも当然　と言わんばかりの表情を浮かべながら　ニーナは言った
意味が分からない　我々？　自分達と言う意味か？　ニーナも含め
て？

「我々ってのは？　都市の人間？　それとも　企業？」

彼女が一瞬 視線を外した　すぐに戻す

それは隠し事や　言い辛い　そんな感じじゃない

何だ？　探るような視線を向ける　それを彼女は躲す

『それは　勿論——』

一拍溜めて彼女は続けた　次の言葉を待ち受ける

——だが　残念ながら　その時は来なかった

突然のサイレン　甲高い警告音

コックピットの中で喧しい音が響き渡る

続いて別の女性の声

【テキ　セツキン　キケン　キケン　キケン】

機体の頭部　そこに備えられたAIからの警報

目の前のオペレーターよりも　よっぽど頼りになる彼女が叫んだ

『どうやら　お喋りはここまでのようですね』

ニーナの言葉に　皮肉を込めて鼻を鳴らす

どうせ敵が来る事を知っていたんだろう

さっき目を逸らしたのは レーダーを見るため

オペレーター側のレーダーは 索敵範囲がACのそれよりも広い
敵の挙動をいち早く知る事が出来る

二ナより そのレーダーだけ欲しいよな……

「……仕方ない」

今日 何度目かの溜息 まあ どちらにせよ

そんな高望みを言っただけ それこそ 仕方が無い……

……せめてオペレーター 変えてもらう事 出来ないのかな？

『では 無事に帰還できるよう 祈ります』

そんな嘆きの思考に割り込むように 彼女は無表情でそう言った

「お前が？ 誰に祈るんだ？」

そう問い掛けようとして 止めた

別に他人が何を信仰していたって構わないと思っている

だから それはどうでも良いと 問うのを止めた

他に聞きたい事は山ほどある さっさとお客を片づけよう

色々聞くのは それからでも遅くは無い

喋るかどつかは別として だが……

——オペレーターの冷たい声が消える

入れ替わりに ノイズ交じりの女性の声が 耳元で囁く

【システム キドウ】

戦闘の合図 戦いが 始まる——

- Mission 1 - 長い一日（後書き）

かなり前に書いていた小説です、直しと復習を兼ねて投稿させて頂きました。

ご覧のとおり句読点などを省いているので見辛いかと思います、それでも読んで下さった方、ありがとうございます。

話数が結構ありますので、時間がある時に上げていきたいと思っています。

- Mission 1 - 灰色の雲

低い唸り声が聞こえる 姿はまだ無い

音が聞こえる 音だけが聞こえていた

ACのブースターにも似たような音

距離はまだあるようだ……いや 見えた

まだ待ち合わせ場所には遠い

それでもあの大きさか……

「ヤツとの距離は？」

二ーナに向かって距離を問う そして――…

『距離 1500』

後悔する

「……1500……それであのデカさ……」

あまりの事に レバーを握る手が汗ばむ

それが 徐々にコチラに向かってやって来る

「ニーナ 距離を報告 2000 ずつ」

顔は上空を向け 目だけニーナに向ける

それに 伏目がちに彼女は応じた

『解りました 距離1000』

いや 徐々に なんて速さじゃない

「おいおい……」

グレイクラウド 彼女は脚が自慢らしい

『距離 800』

速度が異常 それも 予想以上

『距離600』

「ニーナ…もう良い…」

聞かなくても解る 目の前にいるのだから

思わず笑い声が漏れる 何だ…これ…

「ACの3倍？ これで？」

目前に迫るソレは ニーナの情報より遥かにデカかった

3倍なんて可愛いもんじゃない 控えめに見ても4倍

いや 軽く5倍以上はあるぞ……また 騙されたか？

頭を過ぎる チラツとニーナに目をやる 彼女と目が合う

苦笑いを浮かべる いや と頭を軽く振る それは無いか

まあ 3倍でも5倍でも コツチよりデカイのに変わり無い

ヤツはコチラの頭上を無視するように通り過ぎ 先へと進む

デートをするにも相手が悪い このお嬢様では高望みが過ぎる

いつその事 このまま 『またね』で 帰ってくれないかな……

空しい希望を抱いてみる 当然 その望みは叶えてもらえなかった

彼女はコチラに駆け寄ってくる 遠慮したい……ダメ……？

『……— だったら 落ちるまで付き合いましょ……—』

溜息一つ 覚悟を 決める——

「ニーナ ヤツとの距離を」

『はい 距離900』

900…… 思わず自分の両手を眺める

攻撃はまず届かない 当然か

通常の武器でもそれは同じ事

届くとしたら それはスナイパーライフル位のもの

それに反して コチラの手持ちはブレードのみ

少しばかりの後悔

ニーナの瞳に非難の色が混じる 『それ見た事か』 と

苦笑い一つ 目線を上げる お嬢様を見上げて考える

「さて どう口説くか……」

瞬間 突然の破砕音 何かが弾けたような音

眉をひそめる 目を凝らす 数個の輝きが瞬く

更に数度 奇妙な音は続く もう一度 目を凝らす

光りの塊 白煙の束 あれって……

「——ヤバッ——!!」

気付くのが遅れた いや むしろ考えたくなかった

さっき聞いた ニーナの説明を思い出す

『本体上部 左右に8連ミサイルポット』

左右8発 計16発のミサイルの束

それがコチラを目指して突っ込んでくる

回避 頭に浮かぶ バカを言え

ヤツの持ち手は一つじゃない

もし全弾回避しても次が来る

舌打ち一つ ミサイルが間近に迫る 盾を探す

視線の先 前方に背の高いビル その残骸

両手のレバーを前に倒す 機体が前進する

ペダルを踏み込む ジェネレータが唸りを上げる

ブースターにエネルギーが送られる 火が入る

機体が前進 1歩 2歩 そのままブーストダッシュ

目を付けた残骸まで一気に駆ける

「間に合う……か!？」

目前に迫る無数のミサイル

一発 二発 三発

機体のすぐ脇を掠める

通り過ぎて後方で爆発

それを確認 一瞬目を離す

「——ッ！」

目を見開く 思わず言葉を失う

四発目 それが目の前に迫る なんて迂闊

「クソッ！」

舌を打つ 咄嗟に両手のレバーを左斜め前に倒す

機体はその動きをトレースする 左斜め前に走る

頭部の右側 目の横辺りを掠める ギリギリで回避

「なッ?!」

4発目の斜め後ろに…… 5発目!?

この間合い……これは躲し切れない——ッ!

? 死?

不吉な単語が頭をよぎる

ダメか 諦めの言葉が脳裏に浮かぶ

だが 突然コア本体から低い呻き声が響く

次いで 青い光がコアから放出 そしてミサイルを撃つ

コアに内臓されたミサイル迎撃システム 思わず拳を握る

ミサイルが機体に被弾する その直前で爆ぜる

爆風を掻き分けながらビルの残骸 その陰に滑り込む

直後 立て続けにミサイルがビルに被弾 爆風が舞う

ビルが軋みを上げながら揺れる 長くはもたないか

唯の石の残骸が あれだけのミサイルの雨を食らって耐えられる筈が無い

素早く視線を巡らす 更に前方のビル ブーストを全開にしてその陰に飛び込む

その直後 後方で ビルの残骸の崩れる音がした

グレイ・クラウドは いつの間にか頭上 真上にいた

当たり前だが 自分の真下にまではロック出来ないらしい

少しホツとする 深く息を吸い込み 大きく息を吐く

とりあえずの休息 体勢と息を整える 気が緩む

『――馬鹿』

小さくニーナが呟いた

それは彼女の静かな警告

ハツとする が 遅かった

『!?!』

奇妙な機械音 続いて閉じられた複数の瞳

一瞬 思考と時が止まる 甘かった……

「小型自律兵器……?!」
ヒット

叫ぶと同時にその瞳が開いた そして針が飛ぶ

いや 針のように細かい 無数のレーザー

声にならない悲鳴を上げながら 必死にペダルを踏み込む

ブーストダッシュ 向かう目標など決めていなかった

ただ あの群れから逃げ出すためだけに走らせる

後方を見る ビットの姿が消えていた 前方に視線を戻す

「早いッ!!？」

目を見開く 既に目の前に回り込んでいる いつの間に!？

迷わず両方のレバーを右に倒す そしてペダルを踏み込む

ジェネレータが勢いを増す ブースターが火を噴き加速する

瞳の脇を抜ける 足元でレーザーが弾ける 敵の反応が早い

機体の後ろにへばり付かれている

「シッコイんだよ!!」

叫びながら急停止 そして前方を向いたままバックダッシュ

虚を衝かれたビットは動きを止める

このまま逃げ切って……

「……え？」

重い音が響く 機体が動きを止める 頭の中が白くなる

ニーナが溜息をついた 恐る恐る背後に視線を巡らす

「しま……ッ」

背後にはビル　その残骸　機体を優しく抱き止めていた

そして足元に影が生まれる　砂漠の砂に無数の影

今度も　恐る恐る仰ぎ見る　そして奴等と目が合った

2度目のシャワー　機体も悲鳴を上げる

歯を食い縛りながらペダルを踏み込む

何度目かのブーストダッシュ　逃げる逃げる

かなりヘヴィな鬼ごっこ　捕まったらそこでオシマイ

後ろも見ずに滅茶苦茶に走る　暫くして　あれ……？

思わず立ち止まる　鬼がその役割を放棄したのか追って来ない

後ろを振り向く　小さな爆発　それが連続して起こった

それは唐突な終了　ビットの稼動時間が切れたらしい

今のうちとばかりに　手近な建物の　その陰に身を隠す

暗がりの中で　唯一煌々とするモニターに目を向ける

機体の破損率50%　半分持ってかれたか　唇が歪む

「――…十分だ」

まだ 戦える――…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562y/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

2011年11月24日16時45分発行